

イタリアの古典学者メイ（Girolamo Mei, 1519-1594）は主著『古代旋法論』において、独自のアリストテレス『詩学』解釈から、古代の悲劇とは、台詞をすべて歌い、部分的にコロスの踊りを加えた一種の音楽劇であったとする見解を表明し、16世紀末のオペラ形式誕生に弾みを付けた。その一契機となったのが、メイによる悲劇カタルシスの解釈である。すなわち、古代悲劇が強い情動を観者に喚起し、以てカタルシスを成し遂げたのは、言葉と歌の力もさることながら、コロスの踊りが団員自らの身体の動きによって情動を現示したからだというのである。その際、音楽のカタルシスについては、実質的に『政治学』第8巻が基となっていると思われるが、踊りの論はアリストテレスに直接の対応物がない。レスターニ（1990）はこれをメイ自身の創作と見るが、私の考えでは、『詩学』の「見かけ（ὄψις）」の概念に、その構造を認めることができる。

「見かけ」は『詩学』第6章で悲劇の6構成要素の一つに数えられながら、筋（μῦθος）重視の立場から、著者の扱いは軽く、注釈者の目を引くこともほとんどなかった。しかしそもそも、「見かけ」とはどのような概念なのだろうか。まず押さえるべきは、列挙の直後で、「見かけ」が摸倣の方法（ὥς）と位置づけられていることである。方法とは、第3章で立てられた報告か演示かの区別を指し、悲劇は後者に分類される。つまり「見かけ」は、舞台上の演技を含む。

次に、6構成要素それぞれの説明の中で、「見かけ」は「心を動かすもの（ψυχαγωγικόν, 1450b16-17）」とされるが、この「心を動かす」作用は、直前で「筋の部分」としての「急転（περιπέτεια）」と「認知（ἀναγνώρισις）」（1450a33-35）について認められている。そして第11章では急転と認知が「憐れみまたは恐れを持つ」（145a38-b1）とされるので、筋が「心を動かす」と言うとき、その内容は憐れみと恐れを喚起することに他ならない。同じことが「見かけ」にも当てはまる。それは、第14章の「恐ろしいものと哀れなものは見かけから生じることがある。しかしできごとの組み立てそのものから〔生じること〕もある」（1453b1-3）という記述から確かめられる。「見かけ」はカタルシスの前提としての憐れみと恐れを喚起する。

最後に、第26章において、「見かけ」の内容として、「踊り（ὄρχησις）」と身体の「動き（κίνησις）」への言及がある（1462a 8-11）ことから見て、演技としての「見かけ」がコロスの踊りを含むことは疑い得ない。以上から明らかなように、『詩学』の「見かけ」概念は、カタルシス作用を踊りにも認める可能性を蔵している。確かにアリストテレス自身は筋重視の立場から、この方向を追求することはなかったが、『詩学』の論の構造はそれを示唆しているのである。